

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業報告書

プログラム名	Web講義コンテンツの活用とメンターシップ養成による地域教員研修プログラムの開発
プログラムの特徴	地理的に特徴的な条件を持つ地域における効果的な教員研修方法を開発する。 Web講義コンテンツ活用による合理的・省力的な教員研修方法の構築とメンターシステムによるヤングミドルリーダー育成を通じた自主的な教員研修方法の構築を行い、地理的不利を克服する教員研修のプログラムを開発する。

平成31年 3月

機関名

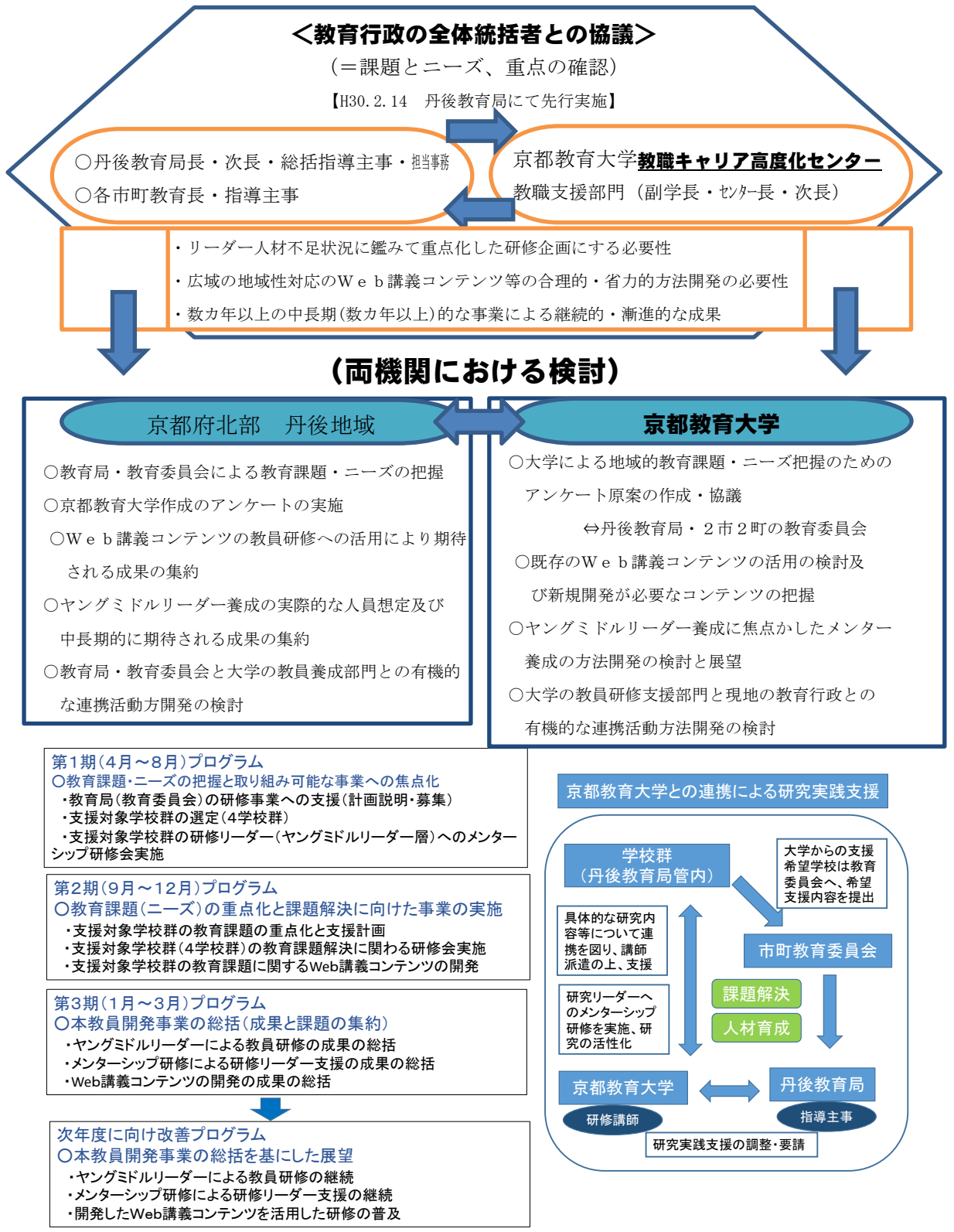
連携先

京都教育大学

プログラムの全体概要

※各教育委員会等の研修実施の参考例となると思われる開発成果を中心に、プログラムの全体概要をポンチ絵等でまとめてください。

1. 地域的な不利な条件により阻害されている教員研修の実態把握とニーズの掘り起こし
 京都府北部地域の教員研修の実態と成果の分析による阻害要因の把握
 京都府丹後教育局管内を地域として対象とする
 (宮津市・京丹後市・与謝野町・伊根町)



1 開発の目的・方法・組織

① 開発の目的

京都教育大学はこれまでW e b 講義コンテンツによる教員研修システムを開発している(現状102本作成)。また、平成27年度からメンターシップ育成事業に取り組み、一定の成果を挙げている。この二つの成果を有機的に連動させて、地域の条件・特性をふまえた教員育成プログラムを構築し、地理的・人材交流的に不利な地域の教員研修制度を開発することを目的とする。京都府北部地域(丹後教育局管内)は、京都府教育委員会の教員研修の中心である京都府総合教育センターから遠く、時間的にも金銭的にも、様々な教員研修から不利な条件となる位置にある。また、大量退職大量採用や少子化による学校の小規模化、統合などによって、教員の構成に歪みがみられる。

こうした中で、教育の質の担保や新しい教育課題への対応のためにも、人材育成は急務であり、教育課題の解決のための力量形成等、教員の資質能力の向上は喫緊の課題となっている。こうした背景の中で、京都府北部支援事業として、京都府丹後教育局(以下「丹後教育局」という。)の宮津市、京丹後市、与謝野町、伊根町(以下「2市2町」という。)の事業である「丹後の連携はぐくみ校」に対する支援プログラムを提供することで、学校や地域のニーズ、教育課題に対応し、北部地域の人材育成に資することができると思われる。

「丹後の連携はぐくみ校」は北部地域(2市2町)にある小中連携を基盤とする教育課題、小小連携を基盤とする教育課題、保幼小連携を基盤とする教育課題に関わって研究を進める学校群である。学校連携を基盤とする課題解決に向けた支援を大学としてどのように行うか、また丹後教育局と連携し、教育課題解決の中でミドルリーダーを核としたミドルアップダウンの経営方略に基づき、人材育成をどのように進めていくのかという研修プログラムの開発を行い、教員研修にとって地理的に不利な条件にある地域における研修の在り方について具体的方策を提案したい。教育課題が異なることから、各教科教育、幼児教育、特別支援教育の各担当教員と連携し、プログラム開発を行う。

② 開発の方法

○現地教育行政機関(丹後教育局・2市2町教育委員会)との協議

定期的・継続的に丹後教育局及び2市2町教育委員会とプログラム開発やその実効性に関する協議を行い、現地教育行政機関の理解と連携協働して、より質の高い成果を確保する。

○京都府北部丹後地域の特性を反映した教員研修用W e b 講義コンテンツの開発

メンターシップ育成のためのW e b 講義コンテンツと丹後地域の特性を生かした教員研修のためのW e b 講義コンテンツを開発し、利活用する。

○メンターシップ育成講座の実施

研修の中心的存在となるヤングミドルリーダー層を対象に、メンターの3要素であるコーチング・省察・ファシリテーションにかかわる研修会を本学のメンタープロジェクト担当教員が実施し、メンターシップ理論と実践について理解を深めるとともに、丹後地域の実情に即したメンター育成の在り方について考案する。

○ヤングミドルリーダーによる試行的・実験的な教員研修の実施

2市2町における「はぐくみ連携協力校」と協力し、W e b 講義コンテンツを活用した教員研修、ヤングミドルリーダー主導の校内(小地域)研修を実施する。

具体的には、京都府教育委員会丹後教育局が所管する「京丹後はぐくみ連携校支援事業」における教育課題に関わる支援としての研修講座の設定や教材開発を行う。

③ 開発組織

No	所属・職名	氏名	担当・役割	備考
1	教職キャリア高度化センター(センター長)	植山 俊宏	全体統括、対象機関との協議、Web講義コンテンツ開発	教育学部 教授
2	同 教授(センター次長)	橋本 京子	全体統括補助、Web講義コンテンツ開発	
3	同 教授	高柳 真人	メンターシステム開発	
4	同 准教授	樋口 とみ子	地域特性の分析、課題の抽出・焦点化・Web講義コンテンツ開発	
5	同 准教授	飛田 祥	地域特性の分析・課題の抽出・焦点化、事業の検証プログラム(PDCA)の開発	
6	同 兼任教員	村上 忠幸	メンターシステム開発	

2 開発の実際とその成果

京都府教育委員会と京都教育大学の連携・協働包括協定を再締結し、平成28年に北部創生人材育成が追加されたことにより、京都教育大学教職キャリア高度化センターと丹後教育局が協働し、京都府北部支援プロジェクトとして「丹後の連携はぐくみ校」の研修支援計画を検討し、以下のような基本概要と計画を決定した。

- ① 各はぐくみ連携校のニーズや教育課題に対応した研修支援を行う。
- ② 各はぐくみ連携校の研修リーダーにヤングミドル層を位置付け、人材育成の研修を行う。

日程計画	内容
4月17日	○丹後教育局、丹後地方教育長会議での説明・協議会 内容：本研修プログラムのねらい・概要・計画の説明、質疑応答
5月～6月	はぐくみ校応募、協議を受けたニーズ・課題の絞り込み
7月～8月	はぐくみ校の研修リーダーへのメンター研修
10月～12月	課題研修 はぐくみ校のニーズに応じた課題研修 (保幼小連携 小小連携 小中連携 保幼小中連携の4学校群)
12月～2月	はぐくみ校のニーズに応じたWeb講義作成の取組・研修

○対象、人数

・教育課題研修

丹後教育局管内の「丹後のはぐくみ連携校」に所属する保育園・幼稚園・小学校・中学校の保育士及び教職員、215名

「丹後の連携はぐくみ校」

(指定校：小小連携)

宮津市立日置小学校 宮津市立吉津小学校 宮津市立府中小学校 宮津市立養老小学校の教職員 53名

(指定校：小中連携)

与謝野町立加悦中学校 与謝野町立加悦小学校 与謝野町立与謝小学校 与謝野町立桑飼小学校の教職員 67名

(指定校：小中連携)

与謝野町立加悦中学校 与謝野町立加悦小学校 与謝野町立与謝小学校 与謝野町立桑飼小学校の教職員 67名

(指定校：保幼小連携)

京丹後市立かぶと山小学校 京丹後市立かぶと山こども園の教職員 28名

・人材育成研修

「丹後のはぐくみ連携校」に所属し、研修を担当するヤングミドル層を対象とする。経験年数が5年次から15年次程度の層を想定。 14名

(1) 研修対象：「丹後の連携はぐくみ校」指定校：小小連携

「宮津市小中一貫教育の趣旨に基づいた宮津市立4小学校における小小連携による「児童の学力向上とコミュニケーション能力の育成」

○ 研修の背景および目的

宮津市立4小学校の児童数は、吉津小学校68名、府中小学校81名、養老小学校33名、日置小学校22名と、いずれも小規模校である。4小学校ともそれぞれ特色があるが、共通点として、小規模校であるがゆえに大勢の中で切磋琢磨することが少なく、授業の中で多種多様な意見を出し合い練り合うこともできにくい。同じ中学校に進学する宮津市立4小学校が、宮津市の小中一貫教育の趣旨で、どんな子どもたちを育成して、どんな力を付けさせて中学校へ送り出すかを明確にして連携することにより、児童に質の高い学力と社会を生き抜く力を育成する。特に様々な学力テストの結果、算数の学力に課題が見られるため、算数の学力の向上と、中学校で通用するコミュニケーション力を高める研修に取り組む必要がある。

○日程・講師、期間、会場

- ・日程 平成30年10月31日(水)
- ・内容 算数の学力向上とコミュニケーション力について
- ・講師 黒田 恭史(京都教育大学教授)
- ・会場 京都府宮津市府中地区公民館

- ・日程 平成31年1月22日(火)
- ・内容 算数教材作成(ICTを活用した算数コンテンツ作成)
- ・講師 黒田 恭史(京都教育大学教授)
- ・会場 宮津市立府中小学校

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- ・小規模校が連携して算数の学力向上に取り組む際の基本的な考え方、新学習指導要領のねらいや「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の在り方と、算数の授業における学び合いを通じたコミュニケーション力の育成という基本的な考えの理解を目指した。
- ・協働してICTを活用した教材開発を行い小規模校のよさを活かした学習システムの開発を目指した。

○研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
算数の学力向上とコミュニケーション力について	2時間	小規模校の課題となっている算数学力の向上とコミュニケーション能力の向上	講義形式、パワーポイント 教材：配付資料 講師：黒田 恭史
算数教材の作成（ICTを活用した算数コンテンツ作成）	3時間	算数の分かりやすい学習コンテンツの作成（個別学習用）	講義と演習、パワーポイント 教材：配付資料 算数コンテンツ 講師：黒田 恭史

○実施上の留意事項

（算数の学力向上とコミュニケーション力について）

該当学校群における実態を踏まえ、新学習指導要領のねらいや「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の在り方、算数の授業における学び合いを通じたコミュニケーション力の育成等を具体的な授業ビデオや教材を通して理解が深まるように留意した。

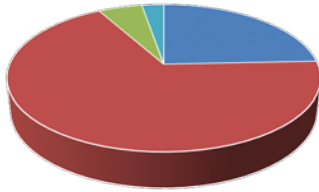
（算数教材作成 ICTを活用した算数コンテンツの作成）

担当講師が中心になり、大学において作成していた算数教材コンテンツを基本に、受講者の希望に基づいて選択する教材のコンテンツづくりに取り組んだ。コンテンツに基本形があるため、はじめから作成するという精神的・時間的負担が少なく、また、受講者自身が改善して作り直すことができるように留意した。

○研修の評価方法・評価結果

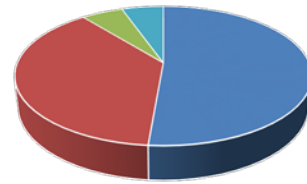
受講者に対するアンケートは、「この講座への期待はあったか」「参加してよかったか」「講座の内容は実践に活かそうか」の3点と「本日の講座についての意見・感想」からなるものである。受講者の評価としては、下図に示すとおり、「この講座への期待はあったか」は、92%、「参加してよかったか」は90%、「講座の内容は実践に活かそうか」は92%が肯定的評価となっている。また、自由記述からは、アクティブ・ラーニングの在り方について理解を深めたり、授業コミュニケーションの基本を再確認できたり、実践意欲が高まっていることが分かった。

この講座への期待はあったか



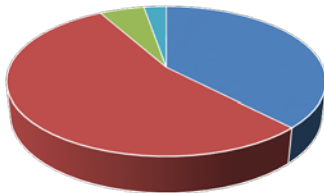
- とてもあった
- あった
- あまりなかった
- なかった
- 無回答

本日の講座に参加して



- 大変良かった
- よかった
- どちらともいえない
- あまりよくなかった
- 無回答

講座の内容は、実践に活かそうか



- 大変活かそう
- 活かそう
- どちらともいえない
- あまり活かさない
- 無回答

(アンケート記述内容より)

- ・アクティブ・ラーニングに対しての考え方（段階があること）が分かったので、担任しているクラスがどの段階か考え、実践を改善していこうと思った。（20代、小学校）
- ・アクティブ・ラーニングは、どのようにしていったらよいのかわからなかったけれど主体的・対話的と順に分けてなら、少しずつ進んでいけるような気持ちになります。又、4人の学級なのであまりやっていませんでしたが、ペアでの

意見交流もやってみようと思います。（50代、小学校）

- ・書く力、話す力、聞く力を育てていくための順番も教えていただいたので、その力を少しずつ育てていきたいと思いました。（30代、小学校）
- ・とにかく、どの教科でも書かせること（書くスピードが遅すぎるので）をしています。でも、9年先を目指して書かせます。また、接続語を正しく使って話したり書いたりすることができるように指導したいです。（50代、小学校）
- ・ノートをとることのたいせつさや対話させるための方法がわかった（30代、小学校）
- ・考える力を付けるため、書く力を付けるため、私自身まだまだ学びが足りないと感じていた中での講座だったのでそう感じました。（20代、小学校）
- ・理論だけでなく、実践にどのように活かしたらよいか具体的な手立ても教えていただき有り難かったです。（20代、小学校）
- ・今の学級の児童のことを思いうかべると、何が弱いのが分かり、そのためには書かせるのが大切だということが分かったから。（40代、小学校）
- ・算数をメインにアクティブ・ラーニングについて教えていただき、自分の学級の課題に対する手立てが明確になり、今後の参考になった。（20代、小学校）
- ・「主体的・対話的で深い学び」についての内容が非常に現場に合った言葉で述べられたので、改めて考えられる機会となった。アクティブ・ラーニングを実践していく上で、子ども達に付けていかなければならない力があり、段階的に進める必要を感じた。（20代、小学校）
- ・理解のピラミッドにより、アクティブ・ラーニングの方法が整理できた。検討をつけるこ

とで、正解にせまったり、技能の意味理解につながったりすることがわかった。ルールを明確にすることで図形においても検討をつけることができることが理解できた。(40代、小学校)

- ・教員全員で受講できたことは、授業改善にとって大きな効果です。(50代、小学校)

○研修実施上の課題

- ・4月開始の事業となり、はぐくみ校のニーズを絞り込むことに時間がかかっていたため、小小連携としての課題はいろいろあったが、研修課題を絞り込む時間が遅くなり、全体研修会が10月末となり、実践に活かせることに時間がかかったこと。
- ・全体研修会を踏まえて、各小学校のニーズに応じて教材作成を行うことになったが、取り組みの期間が短くなり、1回のみの実施となった。今後も教材作成等を継続発展させるために、支援の在り方を考える必要がある。
- ・ニーズや課題に応じた連携研修支援Web講義コンテンツ作成については、算数・数学科の協力により作成できたが、事業の取組が遅れたため完成が遅くなり、試行としてWeb講義コンテンツを活用した研修が実施できず、取組の開始時期を早めることが必要である。

(2) 研修対象：「丹後の連携はぐくみ校」指定校：小中連携

「小学校『外国語活動・外国語科』から中学校『英語』への円滑な接続を目指した小中連携」

○ 研修の背景および目的

昨年度、校区の3小学校へ、加悦中学校英語科教諭が6年生外国語活動の授業参観と6年生対象の出前授業を実施した。しかし、小中学校の教員間での事後の研究会や定期的な協議会等の計画もなく、円滑な小中接続のための連携の在り方や具体的な指導方法の工夫も不十分であった。そこで、小学校の外国語活動・外国語科から中学校の英語への円滑な接続に向け、与謝野町学力向上対策委員及び研究推進部を中心として、指導計画・指導方法・教材・教具等の確認、出前授業、小小連携等の実施と小中合同研修会等での授業公開を実施し、指導方法について研究を進め、小学校『外国語活動・外国語科』から中学校『英語』への円滑な接続を目指した。

○日程・講師、期間、会場

- ・日程 平成30年11月14日(水)
- ・内容 小学校『外国語活動・外国語科』から中学校『英語』への円滑な接続を目指した小中連携
- ・講師 泉 恵美子 (京都教育大学教授)
- ・会場 与謝野町立加悦中学校

○各研修項目の配置の考え方(何をどの程度配置すべきと考えたか)

・与謝野町学力向上対策会議加悦中ブロック「授業改善実践交流会」部会が中心になって、公開授業、授業交流、研究協議を行うという主体的研修会の開催を支援するという形で全体講演と授業実践への指導・助言を行い、中学校教員も含めた共通理解の基盤を図るようにした。

・ 1中3小学校における『外国語活動・外国語科』（小学校）から『英語』（中学校）への円滑な接続を目指すために、新学習指導要領のねらいや「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の在り方、小学校中学年・高学年の指導のポイント、より良い小中連携のために、小学校教員と中学校英語教員に求められること、小中連携の滑らかな接続について具体的な指導の在り方の基本的理解を目指した。

○研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
公開授業・事後研究会	1.5時間	自信をもって学習できる児童・生徒を育てるために	指導助言 講師：泉 恵美子
全体研修会	1.5時間	これからの外国語教育に求められること	講義、パワーポイント 教材：配付資料 講師：泉 恵美子

○実施上の留意事項

（自信をもって学習できる児童・生徒を育てるために）

小中連携した「授業改善実践交流会」として、公開授業、授業交流、研究協議に取り組む中で、具体的な授業研究を通して、授業改善に主体的に取り組めるよう支援するとともに、小中の理解を深め、円滑な接続が出来るよう助言を行うように留意した。

（これからの外国語教育に求められること）

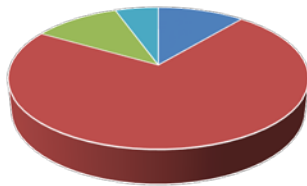
これからの英語教育の基本的な考え方と同時に、小中連携の滑らかな接続について「見合う一話し合う一創り合う」という考え方の大切さを具体的に理解出来るように留意した。

特に、到達目標をつなぐ、指導内容・指導方法をつなぐ、教材・教具を共有する、相互授業参観や交流授業を実施する、小中共通の授業のフレームワークをつくる、教室英語をつなぐ、児童・生徒の英語での交流、入門期の指導は体験的に、中学校の授業の高度化、小中連携して取り組む視点を具体的かつ明確に示す等の観点を示すことに留意した。

○研修の評価方法・評価結果

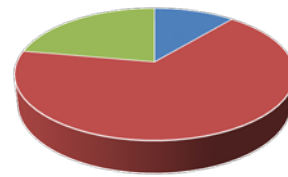
受講者に対するアンケートは、「この講座への期待はあったか」「参加してよかったか」「講座の内容は実践に活かそうか」の3点と「本日の講座についての意見・感想」からなるものである。受講者の評価としては、下図に示すとおり、「この講座への期待はあったか」は、83%、「参加してよかったか」は78%、「講座の内容は実践に活かそうか」は73%が肯定的評価となっている。また、自由記述からは、小学校英語教育の在り方について理解を深めたり、小中連携した英語教育のポイントを確認できたり、中学校英語科担任以外の認識が広まったことが分かった。

この講座への期待はあったか



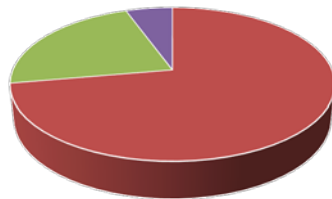
- とてもあった
- あった
- あまりなかった
- なかった
- 無回答

本日の講座に参加して



- 大変良かった
- よかった
- どちらともいえない
- あまりよくなかった
- 無回答

講座の内容は、実践に活かそうか



- 大変活かそう
- 活かそう
- どちらともいえない
- あまり活かさない
- 無回答

(アンケート記述内容より)

- ・英語科ではありませんが、指導要領改訂に向けて、生徒の学びを中心に自分たち教員が、どのように授業をつくっていくのか考えることができた。(20代、中学校)
- ・考え方、授業の工夫等、考えることがいくつもありました。(30代、中学校)
- ・専科の先生にお世話になっていて、自分自身、外国語をどう進めていけばよいのか、よくわからないため勉強になった。(40代、小学校)
- ・英語教育について、たくさん学ぶことができ

た(40代、小学校)

- ・小学校の英語で大切にすることがわかり、参考になりました。(20代、小学校)
- ・少しでも活かしたいと思う内容があったから(20代、小学校)
- ・中・高学年、中学校の指導についての見通しがもてた。(30代、小学校)
- ・現在、英語教育がどのようなねらいがあり、今後、求められる能力なのか、など、知らないことが多かった。これから児童へ指導の際、もっと求めていかなければいけないとけないことに気付くことができた。(30代、小学校)
- ・理論が先行していたように感じた。指導法や実践を盛り込んで欲しかった。(20代、小学校)
- ・英語教育を進めていくために必要なこと、土台となるべきことをさしめしていただいた。(50代、小学校)
- ・専門教科ではないので概略はわかるが、実際に活用することはむずかしい。(50代、中学校)
- ・小学校の先生方の多忙さが増すように思った。また「音」からの英語教育の重要性を感じた。ただ、中学校の他教科教員として、どのように向き合っていけばよいか明確な答を持てなかった。(20代、中学校)

- ・音から慣れ親しみ、楽しく学習することを再確認できた（30代、小学校）
- ・小学校教員・中学校外国語教員にとっては非常に有意義なものになったのではないかと思います。丹後まで足を運んでいただき、ありがとうございました。（20代、中学校）

○研修実施上の課題

- ・4月開始の事業となり、はぐくみ校のニーズは絞り込めたが、「授業改善実践交流会」として、公開授業、授業交流、研究協議の準備が遅くなり、授業研究会・全体研修会が11月末となったこと。
- ・研修会自体の実施が1回となり、また時間的にも要望された内容が多様であったため、要点を絞った説明となり、具体的な実践を交えることが少なくなったため、十分理解し切れない面や、中学校の他教科担当教員への理解普及の課題が残った。
- ・ニーズや課題に応じた連携研修支援Web講義コンテンツ作成については、事業の取組が遅れ作成する時間の確保ができなかったため、取組の開始時期を早めることが必要である。

- (3) 研修対象：「丹後の連携はぐくみ校」指定校：保幼小中連携
「義務教育終了を見据えた実効的な小中連携の推進」

○研修の背景および目的

宮津小学校・宮津中学校は、宮津市小中一貫教育試行実施を来年度に控え、様々な取組を行うと共に、教員の意識改革に取り組んでいるところである。

校区小・中学校の教育課題としては、算数・数学の学力、小学校外国語活動・教育、特別支援教育等があり、小中間での連携が必須となっている。一部の領域については連携が進んでいるが、小中学校全体の連携とはなっていない。そこで、宮津中学校区の児童生徒の学力及び生徒指導の課題の共有化及び共通理解を図り、課題解決のための小中の連携・協働を推進する。

○日程・講師、期間、会場

- ・日程 平成30年11月26日（月）
- ・内容 義務教育終了を見据えた実効的な小中連携の推進
～課題解決のための小中連携・協働について
- ・講師 初田 幸隆（京都教育大学教授）
- ・会場 宮津市立宮津小学校

- ・日程 平成31年2月27日（水）
- ・内容 幼児教育から小学校教育への円滑な移行を目指した教育について
- ・講師 古賀 松香（京都教育大学教授）
- ・会場 宮津市立宮津小学校

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- ・当該はぐくみ校の研修テーマとして「中学校卒業までの10年間を見通した保幼小中の一貫教育」を設定しており、一部連携が実施されているが、より全体としての連携を進めていくために、基本的な小中一貫の在り方、保幼小連携の在り方を理解し、一人一人の教員のベースづくりを行うようにした。
- ・小中連携と小中一貫の違い、小中一貫教育の進め方、小中一貫教育のポイント（教科等

の系統性・連続性を踏まえた学習指導 教育課程の特例の活用 教科等を横断した学習指導に関する工夫 生徒指導・生活指導に関する工夫 評価に関する工夫 5 評価に関する工夫) の基本的理解を目指した。

- ・幼小接続の問題点について、質の高い幼児教育と自己調整力等の非認知能力育成の重要性やスタートカリキュラムにつなぐ幼小接続の重要性等、幼児期の終わりまでに育てようとする姿を踏まえての幼小接続についての基本的理解を目指した。

○研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
全体研修会	2 時間	義務教育終了を見据えた実効的な小中連携の推進の在り方について理解する ～課題解決のための小中連携・協働について	講義、パワーポイント 教材：配付資料 講師：初田 幸隆
全体研修会	2 時間	幼児教育から小学校教育への円滑な移行を目指した教育について理解する	講義、パワーポイント 教材：配付資料 講師：古賀 松香

○実施上の留意事項

- ・「コーディネーター部会（小中の教務主任、保幼の年長担任）」との連携を図り、大学支援研修で何を研修するかのメインテーマを絞り込むようにする。

(義務教育終了を見据えた実効的な小中連携の推進の在り方について)

- ・小中一貫教育を進める根幹となる「小・中それぞれの児童生徒の実態の共通理解、9 年間の出口で実現したい『めざす子どもの姿』の設定、取り組むべき課題の検討、課題解決を図る組織の構築」等、小中教員の共通理解ベースづくりを確かなものにするようにした。また、小中一貫校の具体的な取組を紹介し、イメージがもてるようにした。

(幼児教育から小学校教育への円滑な移行を目指した教育について)

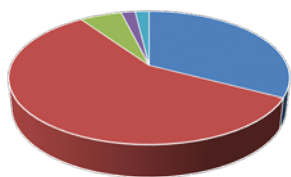
- ・宮津市幼小接続カリキュラムは宮津市版アプローチ・カリキュラムと小1スタートカリキュラムからなるものであるが、就学前期として質の高い幼児教育の上に立った幼小接続になること、幼児期の終わりまでに育てたい姿を踏まえての幼小接続の意義を踏まえるようにした。また中学校教員の参加もあることから10年間を見通した教育のスタートを理解して小中一貫教育に取り組む意識付けを行えるようにした。

○研修の評価方法・評価結果

受講者に対するアンケートは、「この講座への期待はあったか」「参加してよかったか」「講座の内容は実践に活かそうか」の3点と「本日の講座についての意見・感想」からなるものである。受講者の評価としては、下図に示すとおり、「この講座への期待はあったか」は、91%、「参加してよかったか」は92%、「講座の内容は実践に活かそうか」は90%が肯定的評価となっている。また、自由記述からは、小中一貫教育の基本となる具体的な在り方について理解を深めたり、組織や意識改革の基本を再確認したりすることができたことが分かった。

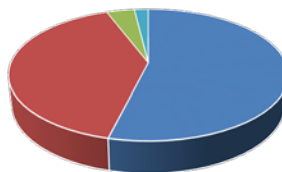
(義務教育終了を見据えた実効的な小中連携の推進の在り方について)

この講座への期待はあったか



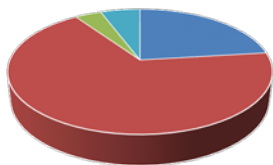
- とてもあった
- あった
- あまりなかった
- なかった
- 無回答

本日の講座に参加して



- 大変良かった
- よかった
- どちらともいえない
- あまりよくなかった
- 無回答

講座の内容は、実践に活かせるか



- 大変活かせる
- 活かせる
- どちらともいえない
- あまり活かさない
- 無回答

(アンケート記述内容より)

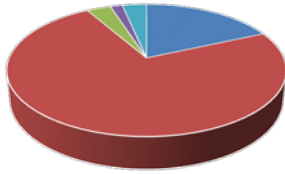
- ・宮津学院の最終、目指す子どもの姿、そこへ向かって保育園の年長として何をを目指すのか、考えてみたいと思います。目指す子どもの姿を小中保幼で共通理解し、つながる事、つなげる事、1つになる事が大切だとわかりました。(50代、保育)
- ・東山開晴館での実践を具体的に教えていただいた。小中一貫が互恵性のあるものでなくてはならないと改めて感じられた。宮中ブロックの取組に

ついて見直せることもあると思う。(40代、保育)

- ・これを機に、取組や組織の見直しをしていくべきだと思った。(30代、小学校)
- ・子どもにどういう力をつけるのか、どうやってつけるかといった根本のところを見直す機会となり、これからの実践に生かしたいと思ったから(20代、小学校)
- ・小中違いはあるが、何をつなぐか、意識するかが大切ということ。出口から小に落としこんで考えていくこと。(30代、小学校)
- ・目標と目的のちがいは実に勉強になりました。また、小中のちがいが「なるほど」と思える内容でした。(30代、小)
- ・目標を1つに、子どもたちに付けたい力のために、どのような取組が必要か考えていきたい。日々の実践の中でも、しっかりと目標を持って指導に当たっていきたい。
- ・目指す子どもの姿を明確にし指導していかなければならないと再確認した。(20代、小)
- ・教育目標を意識した指導という点では、もう一度考えないといけないなと思いました。何を意識して実践すればよいかをみなおすことができました。(40代、中学校)
- ・自分が生徒にどんな力をつけさせたいのかをしっかりと考える必要性を強く感じた。(30代、中学校)
- ・まずは、教師の意識改革が深まったと思うため。リセットされない学びを意識する。子どもに付けるべき力を意識しながら、指導をすすめることの重要性(50代、中)
- ・授業づくりやカリキュラムマネジメント、日常の指導に直結する内容だった。(50代、中)
- ・形よりも「どんな子どもを育てたいか」をまず話し、共有する必要がある、ということがよく分かった。(30代、中学校)

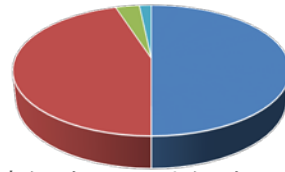
(幼児教育から小学校教育への円滑な移行を目指した教育について)

この講座への期待はあったか



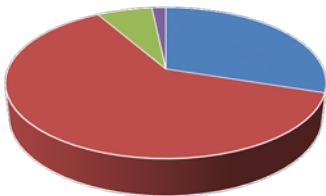
- とてもあった
- あった
- あまりなかった
- なかった
- 無回答

本日の講座に参加して



- 大変良かった
- よかった
- どちらともいえない
- あまりよくなかった
- 無回答

講座の内容は、実践に活かそうか



- 大変活かそう
- 活かそう
- どちらともいえない
- あまり活かさない
- 無回答

(アンケート記述内容より)

- ・ 幼・小で安定基盤を作るために、幼・小の先生がお互いのスキルやカリキュラムを知り、ギャップを減らすという視点。(中)
- ・ 遊ぶ事で、小学校への学習の意欲につながっていくという所が分かった。子どものつぶやき、エピソードを大切にしていきたい。(保)
- ・ 宮津市の小中一貫教育は10年間を見通しての系統的な教育であり、推進していく上で幼小接続はまだ課題となっている。そういった意味で今回の講演で教えていただいたことを、市全体に広げていきたい。また市の10年間の保育・教育課程やアプローチ・カリキュラムの改善点についてもヒントをいただき今後に生かしていきたいと思いました。(教委)

- ・ 健康教育を通して、就学前に付けて欲しい力を更に学校で育てて、色々なことに対するやる気や、興味関心を持たせながら自分で出来ることを増やしていくことの大切さを学んだ。(小)
- ・ 幼児の遊びを、どう学びとしてとらえるかをわかりやすく教えて頂き、小・中の先生方にも知ってもらえることが出来、連携の柱になった。(保)
- ・ 主体性・自立心、といった内容は中学校の教育でも非常に重要なテーマだと考えた。(中)
- ・ 子どもの自立心をはぐくむ活動について、幼小の接続のみならず、各校種、各学年、クラスで取り組むべき活動で、今後の指導に活かせると思った。(小)
- ・ 小学校の教育についても学び、職員間の連携の仕方、大切さも、強く感じました。(幼)
- ・ 幼児教育とユニバーサルデザインの共通点を感じたから。どの学年にも生かせると思う。(小)
- ・ 幼児教育で大切にされていることが、よくわかりました。これまでぼんやりとしていたことが、はっきりとしたので、よい学びになりました。(小)
- ・ 「遊びの中から学ばせること。」それが人を育むことになることがよく分かった。(中)
- ・ 幼児期の子どもからさらに児童期につなげていくためにはやはり「学校は楽しいところ」ということを子ども達に思わせたいと思った。また、そのためのヒントを得られた。(小)
- ・ 低学年の担任をしており、何から何までしていたが、幼稚園で子どもたちは十分な力をつけていたり、考えたりしているのを知らなかった。これからは子どもたちの力を信じ

- ながら、もっと主体的に学ばせることが大切だと感じた。(小)
- ・ 中学校の現場でも活かせる話であり、心の豊かさや人との協力姿勢など、長い期間を見通してじっくり育てていくという指導者の意識が大切だと思った。(中)
 - ・ 中学校の生徒たちに付けさせたい力と等しい部分が多くあり、参考になった。(中)

○研修実施上の課題

- ・ 年度当初から宮津学院というはぐくみ校の実践が進み、様々なニーズや課題が生じる中で研修課題の絞り込みが遅れていき、全体研修会が11月末、2月末となったこと。
- ・ 保幼小中の10年間の連携についての研修を同じ日に行い、より研究協議を深めることが求められるが、二人の講師の日程調整が難しく、より早い時期からの計画実施が必要であると考えます。
- ・ 学校現場の流動的な動きと大学の動きの差があり、互いの特性を理解し合いながら研修支援プログラムを行うことが必要であると考えます。
- ・ ニーズや課題に応じた連携研修支援Web講義コンテンツ作成については、事業の取組が遅れ作成する時間の確保ができなかったため、全体研修会のビデオを撮影することで、自校での再研修に生かせるようにしたが、取組の開始時期を早めることが必要である。

(4) 研修対象：「丹後の連携はぐくみ校」指定校：保幼小連携 「幼小を連携した特別支援教育の在り方」

○ 研修の背景および目的

1、2年学年部や特別活動部、特別支援教育部等が主となり、かぶと山こども園との円滑な連携・接続のため、子どもの交流や教員の指導交流を行い、行動連携を図っている。また、小学校教員による幼稚園・保育所の参観を行い、接続の部分で大切なことを確認しているが、特別な支援を必要とする子どもに対する教育・支援の面でさらに充実させることが必要とされており、特別支援教育を中心とした連携を進め、質の高い幼小を連携した教育を実現していく。

○日程・講師、期間、会場

- ・ 日程 平成30年11月28日
- ・ 内容 「特別支援教育における幼小連携」
- ・ 講師 相澤 雅文（京都教育大学教授（水））
- ・ 会場 京丹後市立かぶと山小学校

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- ・ 幼児期における気付き（SLD、ASD、ADHA、発達性協調運動症のリスクがある子ども）の基本的な理解
- ・ 小学校における気付き（学習面のつまずき、行動面のつまずき）の基本的な理解
- ・ 就学時における連携の在り方の基本と気付きからはじまる支援の理解
- ・ 二次的な問題発生メカニズムと対応の在り方

○研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
全体研修会	2時間	保幼小を連携した特別支援教育の在り方を学び、質の高い連携を実現するため	講義、パワーポイント 教材：配付資料 講師：相澤 雅文

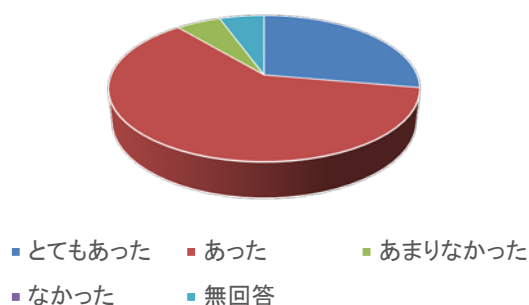
○実施上の留意事項

- ・発達段階を踏まえて、幼児期における気付き（SLD、ASD、ADHA、発達性協調運動症のリスクがある子ども）と小学校における気付き（学習面のつまずき、行動面のつまずき）を理解することから、幼小連携の重要性を捉えられるようにすること。
- ・新しい学習指導要領に発達のとらえが新たに設定され、新しい時代に必要になる能力を踏まえた支援の考え方を理解し、二次的問題も視野に入れた気になる子どもの対応について学ぶことができるようにする。
- ・ビデオ等により具体的な支援の在り方が理解出来るようにする。

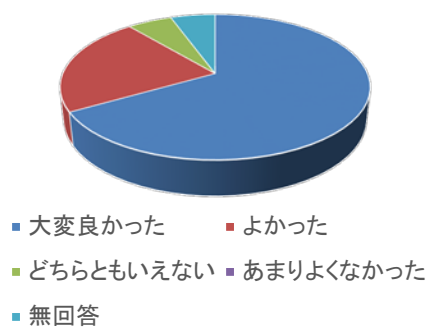
○研修の評価方法、評価結果

受講者に対するアンケートは、「この講座への期待はあったか」「参加してよかったか」「講座の内容は実践に活かそうか」の3点と「本日の講座についての意見・感想」からなるものである。受講者の評価としては、下図に示すとおり、「この講座への期待はあったか」は、89%、「参加してよかったか」は88%、「講座の内容は実践に活かそうか」は、100%が肯定的評価となっている。また、自由記述からは、子どもの困り感を把握する視点、その支援の在り方や、幼小連携による特別支援教育の在り方などを理解し、どのように特別支援教育を進めていくか具体的な在り方について理解を深めたり、組織や意識改革の基本を再確認したりすることができた。

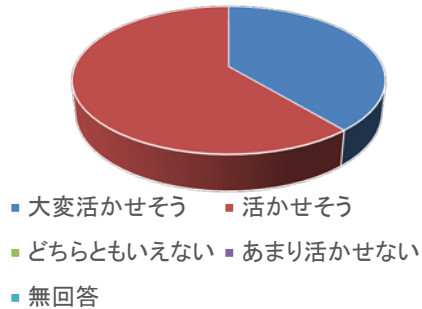
この講座への期待はあったか



本日の講座に参加して



講座の内容は、実践に活かそうか



(アンケート記述内容より)

- ・「気になる」子どもに対して、叱るのではなく、その子の良いところをたくさん見つけ、ほめることが大切であると改めて気づいた。(20代、小)
- ・実際に支援を必要とする、幼児がクラスにおり、今日学んだことが幼児理解と今後の手立てにつながると思いました。(40代、保育)
- ・こどものよさを伸ばすための「よいこせい」は、

本当に大事だと思うし、忘れたらダメだなと思った。(30代、小学校)

- ・目の前の子どもたちをイメージしながら話を聴きました。「なるほど」「やってみよう」と思ったことが、いくつかあり学べた。(40代、小学校)
- ・基本的なことを順を追って整理していただき、よく分かった。個性、よさを伸ばすこと等、基本に立ち返りたい。(60代、小学校)
- ・話された内容が、日常の中でのことと多く重なり、とても参考になった。教えていただいた視点で子ども達を見ていきたいと思う。(20代、小学校)
- ・子どもたちが困っている場面の裏側を考える、とか、できる所に目を向けほめていくことが大切だということを教えていただくことができたから。(40代、小学校)
- ・子どもたちが“何を困っているのか”とらえることを、大切にしたい。発達課題なのか、二次障害なのかを見極め、支援を考えていくこと(30代、小学校)
- ・学校の中に、多くの支援を必要とする子がいて、どう対応していけばよいのかの参考になった。(60代、小学校)
- ・支援児がとても多く、話の中に出てくるような子が多く、どのように支援していけばよいかという手立てにつながることを学べた。(50代、幼稚園)
- ・「愛着障害」よく聞く言葉です。ADHD的であったり、自閉的であったり、みとりが難しいと感じている。将来の自立に向け、今できることを考えていきたい。映像はよくわかった。やはり視覚に訴えるのは大事ですね。(50代、小学校)
- ・特別支援における・・・ということではなく、どの子にも同じように見て、その子の背景や困り感を考えた支援を大切にしたいと感じた。(40代、小学校)
- ・自分の保育を振り返ることができた。今、目の前の子どもたちに、どうかかわっていくか、ヒントになった。明日からすぐにでも生かせる内容で、感謝しています。もっと早くお聞きし、学びたかったと思いました。(20代、保育士)
- ・幼小で連携して、子どもの育ちをしっかりとささえていくためには、互いの子どもの様子を見合ったり、支援を検討し合ったりして、スムーズな育ちを保障していきたい。

(40代、小学校)

○研修実施上の課題

- ・年度当初は、幼小連携の小1スタートカリキュラムやアプローチ・カリキュラムという幼小連携の全体的な研修ニーズをもっていたが、それぞれの実践を進める中で、出てきた課題としての特別支援教育にニーズが焦点化していくことになり、当初大学が研修支援を予定していた講師の変更を行うことになった。そのため研修講師との日程調整が難しい面もあり、早めの研修計画を立てることが必要である。

- ・研修会自体は、大変好評であったが、設定時間が短かったため、受講者の主体的参加を設定できるような協議やグループワークができなかったことが課題になった。
 - ・ニーズや課題に応じた連携研修支援Web講義コンテンツ作成については、事業の取組が遅れ作成する時間の確保ができなかったため、全体研修会のビデオを撮影することで、自校での再研修に生かせるようにしたが、取組の開始時期を早めることが必要である。
- また、京都教育大学の既存Web講義コンテンツの活用を事前に位置付けることで、協議時間を確保することにつながると思う。

(5) 研修対象 「丹後の連携はぐくみ校」全指定校：研修リーダー

○ 研修の背景および目的

地理的条件の不利な地域での人材育成は重要な課題となっており、保幼小連携や小中連携を推進する「丹後の連携はぐくみ校」の研究推進支援事業として、指定校の研究推進を担当する教員の資質向上を図るとともに、地域の教育課題に貢献するリージョナルリーダーを育成するため、その資質・能力の向上につながるメンターシップを身に付ける基盤づくりを目的とする。

○ 日程・講師、期間、会場

- ・ 日程 平成30年11月19日（月）
- ・ 内容 「メンターシップの育成」①
- ・ 講師 村上 忠幸（京都教育大学教授） 橋本 京子（京都教育大学教授）
飛田 祥（京都教育大学准教授）
- ・ 会場 丹後教育局

- ・ 日程 平成31年2月8日（金）
- ・ 内容 「メンターシップの育成」②
- ・ 講師 村上 忠幸（京都教育大学教授） 橋本 京子（京都教育大学教授）
飛田 祥（京都教育大学准教授）
- ・ 会場 京都府総合教育センター北部研修所

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- ・メンターシップの意義やメンターシップの概要について基本的な理解を得る。
- ・各学校や地域におけるリージョナルリーダーにとってのメンターシップの有用性について理解を得る。
- ・京都教育大学のメンターシッププログラムとして提案している3つの力（コーチング力、省察力、ファシリテーション力）について確認する。
- ・3つの力（コーチング力、省察力、ファシリテーション力）の基本的な理解について演習を通して身に付ける。

○研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
全体研修会 ①	3.5 時間	研究推進を担当する教員の資質向上を図り、リージョナルリーダーを育成するため、その資質能力の向上につながるメンターシップ育成の基盤づくりを行う。	講義、パワーポイント 教材：配付資料 講師：村上 忠幸 橋本 京子 飛田 祥
全体研修会 ②	3.5 時間	学校経営に参画し、リージョナルリーダーとして活躍する人材を育成するため、その資質能力の向上につながるメンターシップ育成の基盤づくりを行う。	講義、パワーポイント 教材：配付資料 講師：村上 忠幸 橋本 京子 飛田 祥

○実施上の留意事項

・全体研修会①は丹後教育局の「はぐくみ校」の研究推進リーダーを対象に行うものであり、ヤングミドル層からリーダー層まで、受講者に幅があり、受講意識も多様であるため、自校の状況や自校課題に即した意識を重点にして取り組むようにした。

・コーチングについては、知識をもっている受講者もあり、新たな気づきを得られるような内容にした。

省察については、コルトハーヘンのARACTモデルや8つの窓を中心に、受講者の自校課題などに基づく演習にした。

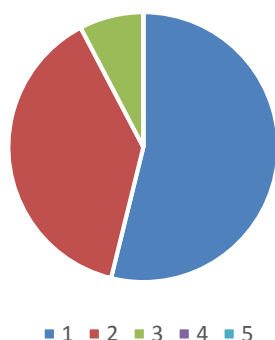
ファシリテーションは、基本的な考え方の理解と、演習とファシリテーショングラフィックによる議論の整理について焦点化して取り組むようにした。

・全体研修②は、北部支援として京都府教育委員会丹後教育局はもちろん、京都府中丹教育局管内のリーダー層を対象にした研修になったため、リーダー的課題を踏まえながら取り組めるようにした。

○研修の評価方法、評価結果

受講者に対するアンケートは、「参加してよかったか」と「本日の講座についての意見・感想」からなるのものである。受講者の評価としては、全体研修①は下図に示すとおり、「参加してよかったか」は92%、が肯定的評価となっている。また、自由記述からは、研修リーダーを担うためにメンターシップの有用性が確認された。全体研修②「参加してよかったか」は100%、が肯定的評価となっている。また、自由記述からは、これからの学校づくりにおけるメンターシップの有用性が示された。

講座に参加した満足度



(全体研修①)

(アンケート内容記述)

- ・ コーチングについてぜひ日々の教育活動に取り入れていきたい。(小学校)
- ・ 演習を通して、コーチング、省察、ファシリテーションの実際の方法を教えていただくことができました。たいへん分かりやすかったです。(楽しかったです)ぜひ実践に生かしたいと思います(小学校)
- ・ 本日の学びを活かせるように更に理解を深めたいと思いました。(教育委員会関係者)
- ・ 今まで学んでこなかった分野だったので、新たに学ぶことができ、よかったです。あと少しとなった今年度ですが、これからのためにも少し学んでいきたいと思いました。(小学校)

- ・ 初めての研修で少しではあるが理解を深めることができた。時間に限りがあり省察についてもう少し学びたかった。(小学校)
- ・ チームを支える側として実践につなげていきたいと思います。(中学校)
- ・ コーチングの大切さ・必要性を感じ、そこから次につなげていく方法を知ることができた。(小学校)
- ・ 具体的な事例を取り上げての演習だったので分かりやすく実践に結びつけやすい内容だった。(小学校)
- ・ 省察の段階でどのように実践していけばよいか、あまり分からなかった。もう少し勉強してみたい。(小学校)
- ・ ミドルリーダーとしての役割が再確認でき、学校のため、学級のためにできることから積極的に行っていきたいと思いました。ありがとうございました。(小学校)
- ・ 学校現場において合意形成を図る必要のある会議では、今日の研修で教えていただいたスキルは大変有効であると思いました(教育委員会関係者)
- ・ 会議や打ち合わせなどで議題を多方面(多人数)から見ていき、会をリードしていくために必要な視点やスキルが学べた。コーチング、省察、ファシリテーション、これら3つの力を使ってより実践が進んでいけるようにやっていきたい。(小学校)

(全体研修②)

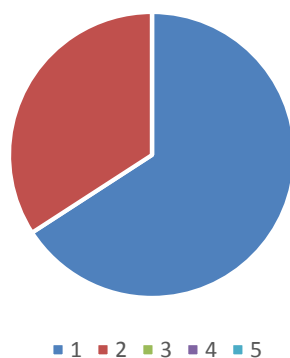
(アンケート記述内容)

- ・ 短時間に多くの学びがありました。人材育成の視点で活用していきたいと思います。(小学校)
- ・ 理論だけでなく体験を通した学びがあり、とてもよくわかり大変有意義でした。(中学校)
- ・ 自身をもっと勉強しないと難しい内容でした(中学校)
- ・ 参加できる機会があればスキルを高め

たいと思います(小学校)

- ・ 講義だけでなく演習と合わせて学べたので、とても分かりやすかったです。(小学校)

講座の満足度



- ・大変お話がわかりやすく興味深く楽しく学ばせていただきました。もっと勉強しなければと思いました。（小学校）
- ・とても興味深く多くの学びがありました。もう少し時間があればと思いました。どうすることもできないかと思いますが、もう少し整理されていれば…と思いました。ぜひ大学で学びたいです。（小学校）
- ・演習でイメージを持つことができ、メンターの必要性を強く感じる事ができたので参加出来てよかった。ありがとうございました。（小学校）
- ・とても実践に生かせる研修でした。（小学校）
- ・これからの学校づくりにメンターシップは生かされると思う。若い教員が学ぶことで、学級経営や授業づくりにも活用できる場所があると思う。（小学校）
- ・くり返し学ぶことが大切だと思った（小学校）
- ・内容はもちろんのこと、講師の講義構成、ファシリテーション、教授法等たくさん学ばせていただきました。（中学校）
- ・もう少し時間があり、質問なども含めできたらよかったです（小学校）
- ・大変よい学びになりました。自分自身を振り返るよい機会にもなりました。（小学校）
- ・日々、人と関わるのでコーチングで学んだこと、ファシリテーター力で学んだことを場に応じて活かしていきたい。（小学校）
- ・すぐに実践できることがたくさんあったので、明日から生かしたい。（小学校）
- ・少し時間が短かったことと、内容が盛りだくさんだった。
- ・具体的に演習しながらの講座でわかりやすく理解できた。（小学校）
- ・コーチング、省察、ファシリテーションについて理解を深めました。話のポイントを整理する時の構造化、図式化は活用できそうです。以前、不登校の事例整理もそういう方法でした。（小学校）
- ・自分に足りないものがたくさんあるなと感じた（小学校）
- ・メンターシップの概要について学ぶことができたが、自校で実践するためには、さらに演習などを行い、スキルを上げていきたいと思う。（中学校）

○研修実施上の課題

- ・京都府北部のリージョナルリーダーとして活躍する人材育成のために、はぐくみ校の研修リーダーをヤング・ミドル層と考え、メンターシップ研修を位置付けることの理解を求めてきたが、各校の職員構成上、年齢や人数の面において柔軟な対応をする必要があった。
- ・各校の研究実践を進める上で、研修リーダーのメンターシップ研修をはぐくみ校全体研修のスタートに位置付けたが、設定日が2回台風等災害を伴う気象状況になったため、研修実施が11月となり、研修リーダーへの支援に遅れがでた。
- ・丹後教育局でのメンターシップ研修を踏まえて、京都府北部（丹後教育局・中丹教育局）のリーダー層にもメンターシップ研修を行い、メンターシップの広がりを目途した。次年度は総合教育センター講座の中で、大学における大学連携講座と位置付けられたが、北部に特化した研修は課題となった。
- ・研修に当たっては、メンターシップ研修の概要として、京都教育大学の既存Web講義コンテンツを視聴することにより、研修内容をより理解しやすくするために、事前視聴を促進し、反転研修型の研修とすることが必要であるとする。

(6) 京都府北部丹後地域の特性を反映した教員研修用Web講義コンテンツの開発

○「算数動画コンテンツ制作講座①」

本講義では、算数科でICTを活用する方法として、①ドリル学習における習熟②動画による理解・習熟の促進、③場面指示による問題の共通理解、④GeoGebraなどを用いた図形検証、⑤パワーポイントなどを用いた表現、⑥エクセルなどを用いた数値検証、⑦プログラミングによる論理教育について解説。次に授業でICTが普及しない理由として、算数・数学の学習指導要領は、ICT活用を前提とせずに授業が可能ないように編纂されており、算数・数学の教科書も、ICT活用は応用やトピックス的扱いとなっているため、ICT活用を得意とする一部の教員内での活用にとどまっていると解説している。そこで、ICTを用いた教育の未来では、性能が低いながら、低価格・単純・使い勝手がよい動画コンテンツの継続的な制作であり、これまで個別対応が十分に出来なかった院内学級、不登校、日本語指導を必要とする子どもたちなどへの個別学習支援が必要となるため、本講義の動画コンテンツ制作のコンセプトについて解説した。

○「算数動画コンテンツ制作講座②」

本講義では、上記の「算数動画コンテンツ制作講座①」を受けて、具体的な動画コンテンツ制作における制作のポイント、開発する教材の主要なイメージ、教育効果、必要性などについて説明し、実際に演習することを目的として作成した。

○「質問と発問の工夫から始まる数学の授業について」

本講義では、数学の授業における「質問」と「発問」の違いを説明し、中学校第3学年「平方根」の単元を例に、数学の授業での「質問」と「発問」の工夫を解き、よりよい「質問」と「発問」とはについて解説した。

○「子どものことばから幼小接続を考える」

本講義では、①乳幼児期のことばの発達、②幼児期から児童期へ、③幼児期の学びと小学校の学習との接続について解説した。①については、ことばの土台には他者との関係があり、ことば以前の段階のコミュニケーションが鍵となること、養育者の何気ないかわりや遊びが重要であることを解いた。②については、ことばによる思考と行動調整、一次的ことばと二次的ことば、生活的概念と科学的概念、語彙と書き言葉の発達について解いた。③については、幼小接続が求められてきた背景、子どもの連続的な発達を相互理解すること、幼児教育と小学校教育、接続の手がかりとしての10の姿からことばに関連の深い項目を例に解説した。

本学はこれまでWeb講義コンテンツによる教員研修システムを開発しており、教員免許状更新講習等においても、利用者から高評価を得ている。本事業においても、地理的不利を克服した合理的・省力的な教員研修方法を開発する観点から、京都府北部丹後地域の特性を反映した教員研修用Web配信ビデオコンテンツの作成することとした。

人材育成に関わるメンターシップ用のWeb講義コンテンツについては、台風等の気象条件により研修におけるニーズ把握が遅れたため既に作成してあるコンテンツを活用することとしたが、教育課題用のWeb講義コンテンツについては、教育課題研修にて得られたニーズを反映し、上記の4つのコンテンツを作成した。

算数のWeb講義コンテンツについては、比較的早い段階からテーマが決まり、研修実施におけるニーズ把握も10月に行うことができたことから、課題解決への手立てとして作成

に取り組むことが出来た。

また、幼小連携の課題については、2つの学校群からテーマとして出されており、本年度の研修のニーズの高さを受け、研修に取り組む前段階からWeb講義コンテンツの作成計画を立てることが出来た。他の2つの学校群のテーマに関わるWeb講義コンテンツは、時間的な課題があり作成することが出来なかったが、既存のコンテンツ視聴の推奨を行った。

今後は、より早い段階からテーマを連携協議し、地域の教育課題に即した適切なWeb講義コンテンツの作成に取り組むとともに、作成されたコンテンツを利用した研修の実施が必要である。

3 連携による研修についての考察

(連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等)

○連携を推進・維持するための要点

本研修プログラムは、京都府教育委員会と京都教育大学の連携の下に実施してきた。

具体的には、研修に不利な地理的条件にある、京都府北部の丹後教育局管内における連携研修の開発に取り組んだ。ここで重要なポイントは、新しい研修事業を増設するスタイルとして取り組むのではなく、学校現場や地域の課題解決につながり、教員の負担感の少ない取り組み方として、丹後教育局が推進するプロジェクトを効果的に支援する連携研修の在り方を模索したことである。

- ・丹後教育局や管内教育委員会と協議する中で、学校現場にとって新規事業というハードル感を下げることで、大学の専門的な立場からの支援を必要とする学校のニーズや課題解決に結びつくものであること、地域の人材育成に資するものであること、を大切な柱として位置付け確認したことが、連携の要点になったと考える。

- ・丹後教育局の既存事業「丹後の連携はぐくみ校」の研修支援を大学連携支援として位置付け、各連携学校群のニーズの把握、要望に基づき研修計画を協議し取り組んだ。このことにより、それぞれのニーズや課題が鮮明になり、「丹後の連携はぐくみ校」の教職員の課題解決への意識を高め、実践にもつながる意欲を高めることができたと考える。

- ・地域人材の育成に当たっては、地域における研修リーダーとして活躍する素地となるメンターシップ研修に取り組んだが、これは自立した研修リーダーとしての意識を高めたり、学校運営としての視点を広げたりする面で効果的であったと考える。

地域のニーズや課題に応じたWeb講義コンテンツの作成を今後も行い、自立的で、継続的な研修を行う基本スタイルを確立することが必要である。

○連携により得られる利点、

- ・各研修後の受講者アンケートの結果から、概ね初期の目的を達成することができたと考えられるが、その理由としては、上述したように学校群のニーズや課題解決に直結する研修テーマになったことと、対象研修を教職員にとって負担感の少ない既存事業のブラッシュアップにしたことによると考える。

- ・この連携体制は、丹後教育局や管内教育委員会との協議の積み重ねによって得られた信頼関係の上に立つものであり、今後も地域における大学の専門性の発信・貢献のベースになる利点となり、連携・推進を維持する基盤であると考えられる。

- ・人材育成のメンターシップ研修は、昨年度から実施している京都教育大学で開発した研修シ

システムである。このシステムの有効活用により、京都教育大学の人材育成システムが広がり、地域人材の育成に寄与できることは、互いの連携の利点であり、リージョナルリーダーとして活躍する人材育成のベースになると考える。

・地域のニーズや課題に応じて作成するWeb講義コンテンツ作成は、大学のWeb講義コンテンツの体系化やパック化に生かされたり、他の地域研修に活用されたりすることになり、Web講義コンテンツを活用した研修の充実につながると考える。

○今後の課題

・地域のニーズや課題に応じた連携研修支援を年間通して行うためには、対象校や対象学校群の募集を前年度末に行い、大学教員の支援派遣等の研修支援体制の確立を早期に行うことを丹後教育局と協議していくことが必要である。

・研修支援校が決まり次第、年間通じた連携研修支援の内容を充実させるために、担当教員と連携校の研修リーダーや管理職との間で、達成目標を協議し、支援の具体化を行うことが必要である。

・ニーズや課題に応じた研修支援Web講義コンテンツ作成については、取り組み開始を早めることによって制作時間・研修試行が確保できると考える。

・北部（丹後教育局管内）での研修は、遠距離移動のため時間を要し、時間の十分な確保が課題であるため、連携校との研修計画づくりの早い段階から、Web講義コンテンツ作成に取り組み、反転型の研修を行うことで、より主体的・対話的で深い学びにつながる研修講座を実現できると考える。

4 その他

[キーワード]

リージョナルリーダー メンターシップ 地理的不利な地域研修
保幼小中連携 小小連携 学力向上 特別支援教育
Web講義コンテンツ 地域のニーズ 小中における英語教育

[人数規模]

※「本事業の研修対象者として1日でも参加した人数の総数を次の記号の中から選ぶこと。補足事項があれば、（ ）内にご記入すること。

A. 10名未満 B. 11～20名 C. 21～50名 **D. 51名以上**

補足事項（ 各回50名程度 ）

[研修日数(回数)]

※「受講者が何日間（又は何回）の研修を受講したかを次の記号の中から選ぶこと。補足事項があれば、（ ）内に記入すること。

A. 1日以内 **B. 2～3日** C. 4～10日 D. 11日以上
（1回） （2～3回） （4～10回） （11回以上）

補足事項（ ）

【担当者連絡先】

●実施者 ※申請する大学名又は教育委員会名を記載すること

実施者名	国立大学法人京都教育大学	
所在地	〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1番地	
事務担当者	所属・職名	研究協力・附属学校支援課 研究協力担当課長
	氏名（ふりがな）	川村 泰史（かわむら やすし）
	事務連絡等送付先	〒〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1番地
	TEL/FAX	075-644-8242／075-644-8182
	E-mail	kenshien@kyokyo-u.ac.jp

●連携機関 ※共同で実施する機関名を記載すること

連携機関名		
所在地	〒	
事務担当者	所属・職名	
	氏名（ふりがな）	
	事務連絡等送付先	〒
	TEL/FAX	
	E-mail	